

酒めん肴 12

このところ「塩」がはやっている。ヒマラヤの岩塩をかけた焼き鳥、などというメニューを見たこともあるし、「死海の塩」をくれた同僚もいる。なるほど塩は生命維持には必須の物質で、体内の塩がちょっと多かったり少なかったりするだけで、たちどころに危機に瀕する。それだけに塩はかつては軍事物資でもあった。上杉謙信の「敵に塩を贈る」話はそのことを如実に示している。日本では内陸によい塩場はなく、必然的に海に頼らざるを得なかったのだ。そういえば甲斐の国には「鮎の醤油漬け」などという名産がある。それは、鮎というたんぱく質ばかりか塩を運ぶ方策だったのではないかと、私は思っている。縄文時代にも内陸への塩の補給は重大問題の一つであった。おそらく当時は海で採った海藻を乾かすなどして運んだものと思われる。いわゆる藻塩である。

国外でも塩の重要さは同じである。古代ローマでは給料は塩で払われていたという。給料を意味する「サラリー」の語源は塩 (salt) である。海のない大陸の奥部では、人びとは岩塩を探し当ててそれを運んだ。同じ哺乳類として野生動物たちも塩を求めた。人びとは、動物たちの行動を見て、塩場を探し当てたのではないかともいわれる。塩場は、水場とともに人間を含めた動物たちのもうひとつの命の泉だったわけである。

生命維持にかかせないこの塩だが、農業にはときに、ずいぶんの悪さをしてきた。国士舘大学の前川和也さんによると、メソポタミアのウル第三王朝のころには、畑の表面に塩が溜まり、小麦ができなくなってしまったという。同じような話はメソポタミアの他の王朝にもあったというし、さらには二〇〇〇年前の桜蘭王国の滅亡も、畑への塩の堆積が関係しているという大阪教育大学の山田勝久さんの説もある。現代になってからも、旧ソ連のアラル海沿岸の砂漠化には、かんがいによる塩の集積が大きく作用しているといわれている。どうもかんがいという人間の行為は、地下深くに眠る塩を呼び起こし、あるいは水に含まれるわずかの塩分を濃縮し、農地に大きなダメージを与えることがあるらしいのだ。

塩と水といい、地上には有り余るほどの分量が存在する。ところがそれらは決して全地球上に均等には分布していない。それどころか水と塩の分布は、人間が何かをすることでますますアンバランスになってゆく。ないところ、必要なところではますます欠乏し、あるところ、不要なところではますます溜まってゆくのである。